

■2020年センター倫理本試験分析

71.0% 61.0%

大問	全国 河合塾	講座	問	講座 正答率	正解	自己 解答	配点	長生 現役 正答率	全国 正答率	全国 講座 差	
1 青年と現代	83.1%	60.0%	1	45	4		3	67	60	▲15	M
			2	45	4		3	89	90	▲45	E
			3	73	4		3	56	47	26	D
			4	36	3		3	89	92	▲56	E+
			5	27	3		2	89	90	▲63	E+
			6	55	1		2	89	93	▲38	E+
			7	64	3		3	78	95	▲31	E+
			8	100	4		3	100	88	12	E
			9	100	1		3	100	84	16	E
			10	55	2		3	100	91	▲36	E+
2 思想の源流	70.1%	65.4%	11	82	1		3	78	64	18	M
			12	27	3		3	100	84	▲57	E
			13	55	3		2	44	30	25	D+
			14	73	4		3	67	80	▲7	M
			15	64	2		3	56	38	26	D+
			16	45	3		2	89	81	▲36	E
			17	82	5		2	78	70	12	M
			18	90	2		3	89	88	2	E
			19	93	2		3	100	96	▲3	E+
3 日本思想	66.1%	58.8%	20	43	2		2	56	70	▲27	M
			21	57	3		3	78	56	1	M
			22	57	2		3	33	27	30	D+
			23	43	4		2	44	66	▲23	M
			24	29	1		3	67	55	▲26	D
			25	57	1		2	44	74	▲17	M
			26	43	4		3	67	60	▲17	M
			27	100	3		3	100	96	5	E+
28	100	2		3	100	92	9	E+			
4 西洋思想	63.6%	56.0%	29	43	1		2	67	41	2	D
			30	71	1		3	89	64	7	M
			31	29	2		3	78	53	▲24	D
			32	29	2		2	33	26	3	D+
			33	57	3		3	67	70	▲13	M
			34	71	4		3	56	64	7	M
			35	43	3		2	89	62	▲19	M
			36	71	2		3	100	97	▲26	E+
			37	90	1		3	100	96	▲6	E+

倫理

2020年センター本試験

解答と解説

提出者

11名

受講者平均

全国平均

長高卒業生平均

65.37 (標準偏差16.20)

第1問 標準 《「友達」という関係について》

問1 1 正解は④

アメリカの分析哲学の立場に立つクワインは、個々の命題の真偽を検証することはできず、個々の命題を含む命題全体の体系についてのみ検証することができるという知のホーリズム（知の全体論）を唱えた。

- A. 「知識の体系それ自体を維持していくしかない」という記述から、様々な命題や言説を「個々別々に」ではなく「一つの集まり」として捉えていると分かる。
- B. ホーリズムは「全体」を意味するギリシア語「ホロス」に由来する。命題はそれぞれ互いに関係合ってひとまとまりの体系を作っていると捉えられる。パラダイムとは、科学者たちが共有する理論的枠組みのことをさす。アメリカの科学史家クーンは、科学の歴史をパラダイム転換として捉えた。

問2 2 正解は④

解説の便宜上、図2の項目内容を上から順に(1)～(5)と表記する。

- ①不適。「アメリカの就労者で、AIを使う側の立場で仕事や業務をするために対応や準備をすると答えた人の割合」は図2の(3)と(4)に相当する。よって「19%未満」という記述は不適。後半の記述については、図1の $\text{■} + \text{□}$ が10.5%なので、「11%程度」は適当。
- ②不適。前半の記述は、図1の ■ が64.4%なので正しい。後半の記述は、図2(1)の日本は13.1%なので、「25%程度」は誤り。
- ③不適。後半の記述は正しいが、前半の「アメリカの就労者で、今の仕事や業務を続けるためにAIの知識やスキルを習得すると答えた人の割合」は図2の(4)に相当するので46.7%である。よって「65%程度」は不適。
- ④適当。前半の記述については、図1の $\text{■} + \text{□}$ が70.6%であることから、「80%未満」という記述は適当。また、後半の記述の「何も対応や準備をしないと答えた人の割合」は、図2の(5)に相当し、アメリカが22.8%、日本が51.2%なので、日本はアメリカの「2倍以上」といえる。

問3 3 正解は④

ノージックは、個人の自由を最大限に尊重するリバタリアニズムを代表する哲学者。国家が強制的に個人の富を取り上げて再分配する「拡張国家」は認められないとし、政府の役割を最小限に抑えた「最小国家」を理想とした。

- ①・②不適。各人の自由は制限されるべきという1文目の主張が誤り。

①・③不適。「拡張国家」を理想とするという2文目の記述が誤り。

問4 4 正解は③

- ①不適。ケアする者は「自分も他者から同様にケアされること」を求めているわけではない。
- ②不適。資料文では、ケアする上で「ケアリング関係を維持」するために道徳的であろうと努めることが述べられており、「ケアリング関係が破綻してしまう」ことについては想定されていない。
- ③適当。怪我や病気という「他者の現実を、自分がそうであったかもしれない一つの可能性として捉えるとき」(資料文5文目)、つまり、「自分もその他者と同じ状態だったのかもしれないと考える」ことで「他者に対して道徳的に行為する」ようになる。また、「他者に対して道徳的に行為する」ことが「自身の理想を高めることにもつながる」という記述は資料文1文目の内容に相当する。
- ④不適。資料文4文目に「私が何かしなければならぬ」という責任感を「自分の内にかき立ててもいる」という記述がある。「責務の念を抱くようであれば」「倫理的な理想は高まらない」という選択肢の記述は、この趣旨に反する。

問5 5 正解は③

- ③適当、①・②・④不適。その人らしさの特徴を意味するパーソナリティや能力等は、遺伝的素質や環境、対人関係、努力の積み重ねなど、多くの要素が影響し合って構成される。「人の個人的特徴の形成」が「遺伝のみに影響される」(①)、「環境のみに影響される」(②)、「遺伝と環境には影響されない」(④)はそれぞれ誤り。

NOTE パーソナリティ(人格・性格)を構成する3つの要素
能力(知能・技能)／気質(感情の傾向)／性格(意志的傾向)

問6 6 正解は①

- ①適当。ノーマライゼーションの説明として正しい。
- ②不適。「仕事と家庭生活との調和」をワーク=ライフ=バランスという。バリアフリーとは、高齢者や体の不自由な人のためにバリア(障壁)を取り除くこと。
- ③不適。ユニバーサルデザインとは、すべての人にとって使いやすいように環境や製品をデザインすること。「高齢者の介護は社会全体で担われるべき」という理念を実現化した制度は介護保険制度である。
- ④不適。選択肢の記述は、男女共同参画社会の基本理念を説明したもの。

問7 正解は③

- ア. 正 情報公開制度は、まず、地方自治体で情報公開条例を制定する動きが広まり、その後、国のレベルでも1999年に情報公開法が制定された。
- イ. 誤 デジタル化された情報はコピー（複製）が容易であるため、「知的財産権（知的所有権）」が侵される危険性が高い。
- ウ. 誤 「情報技術を使いこなせる者とそうでない者との間」に生じる情報格差をデジタル=デバインドという。「個人情報保護法」は個人情報の適正な取り扱いを図るために制定されたものであり、デジタル=デバインドの是正を目的とした法律ではない。

問8 正解は④

- ① 適当。難民の救済事業を行う国際連合の機関として国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が設置されている。
- ② 適当。マララ=ユスフザイ（1997年～）はパキスタン出身。タリバンに襲撃されながらも、女性が教育を受ける権利を世界に訴え続けた勇気ある活動が評価され、2014年に史上最年少でノーベル平和賞を受賞した。
- ③ 適当。途上国の援助のために、日本はJICA（国際協力機構）が青年海外協力隊を派遣している。
- ④ 不適。選択肢の記述はフェア=トレードについての説明。「リサイクルの促進」は関係ない。

問9 正解は①

- ① 適当。近代以降、青年期が長期化する理由を説明した記述として正しい。
- ② 不適。「身体的・知的な成熟」が早まったことにより、青年期の始まりも早くなったが、児童期は消失していない。
- ③ 不適。生き方が多様化した現代では、「職を得て人間関係が安定するような実質的な成人」といえる時期も遅くなっており、自立の準備期間である青年期は長期化している。
- ④ 不適。近年、「社会の流動化と価値観の多様化」は進んでいるが、「大人として認められるための儀式や儀礼は消失」しておらず、青年期も短くなっていない。

問10 正解は②

- ① 不適。Kは、3番目の発話では、「自立した強い個人」になるためにも一緒に高め合う関係が友達だと考えているが、「一人であるべきだ」とは言っていない。
- ② 適当。Kの3番目の発話から適当と判断できる。

- ③不適。Rは「助け合いの実践を重ねて」いった結果として「濃厚で緊密な関係を結ぶ」のではなく、「深い結び付き」という関係があってこそ「助け合う」ことができると考えている（2～4番目の発話）。
- ④不適。「ロボットと友達になる」ことは本文の趣旨ではない。

第2問 標準 《「旅」から考える源流思想》

問1 11 正解は①

- ①**適当**。アリストテレスは、思慮によって導かれた中庸としての徳を目指すべきであると考へた。例えば勇氣という徳は、無謀と臆病という両極端を避けた中庸の状態をさす。
- ②不適。エピクロスはデモクリトスの原子論を受け継いでおり、死とはアトム（原子）の離散にすぎないので、死を恐れる必要はないと説いた。
- ③不適。イスラーム教では、神の前ではすべての信徒は平等であるという徹底した平等主義の理念と聖俗を区別しない立場から聖職制度は存在しない。
- ④不適。荀子は「人間は本来、利己的な存在である」と考へ、礼によって人間の行動を規制する必要があると説いた（礼治主義）。これは、強制力をもった法律を守らせることで国家を統治するという法治主義とは区別される。

問2 12 正解は③

- ①不適。プラトンは、理性によってのみ認識されるイデアこそが真の实在であるというイデア論を唱へた。イデアへの憧れであるエロースが原動力となってイデアを想起するという内容はイデア論・想起説で述べられる。二頭の馬と御者の喩えは魂の三分説で用いられるが、「翼を持った」「天上に飛翔する」という内容は登場しない。
- ②不適。プラトンの想起説では、この世に生まれる前イデア界に住んでいた人間の魂は、現象界では肉体という牢獄に閉じ込められているが、イデアを分有する現実の個々の事物を見ることでイデアを懐かしく思い、イデアを想起することでイデアを認識すると説明される。
- ③**適当**。洞窟の比喩の説明内容として適当。
- ④不適。プラトンは理想国家のあり方を、理性が気概と欲望を統制した魂の姿と類比的に論じ、知恵の徳を備へた哲人が善のイデアを認識し、防衛者階級と生産者階級がそれぞれの徳を発揮するとき、正義の徳が実現すると考へた。

問3 13 正解は③

- ①不適。大乘仏教の側から上座部仏教を批判的に呼んだ呼称が「小乗仏教」であり、上座部仏教の側が自らを「小乗仏教」と名のつたわけではない。
- ②不適。大乘仏教では、「他者の救済」(利他行)につとめる「菩薩」が理想とされ、その道は在家・出家を問わず、すべての者に開かれている。
- ③適当。『般若経』は大乘仏教の代表的經典であるため、その根本的な立場である「あらゆる事象には固定不変の本体がない」という空の思想が説かれている。
- ④不適。選択肢は上座部仏教についての記述。大乘仏教は、中国・朝鮮半島・日本へと伝播したことから「北伝仏教」と呼ばれる。

問4 14 正解は④

- ①不適。墨子は非攻を説いて侵略戦争を否定している。
- ②不適。無為自然の生き方を理想とし、小国寡民を説いたのは道家の老子。
- ③不適。万物斉同の思想を説いたのは道家の莊子。
- ④適当。儒家の孟子は、仁義に基づいて民衆の幸福をはかる王道政治を理想とし、民意にそむく君主は天命を失って追放されるという易姓革命を肯定した。

問5 15 正解は②

- ①不適。朱熹(朱子)が考える天理とは、天地万物に内在している宇宙の原理のことであり、「心の内にのみ存在する」わけではない。
- ②適当。朱熹(朱子)が註釈を加えた『大学』に「修身・齐家・治国・平天下」という言葉で表されている。
- ③不適。涅槃に至るための修行方法が八正道であるという真理は「道諦」という。「集諦」は、苦しみの源は執着であるという心理。
- ④不適。ブッダは、6年間の苦行ののち、菩提樹の下で坐禅瞑想し、真理を悟って目覚めた人(ブッダ)となった。彼は「苦行の実践」を否定した教えを説いた。

問6 16 正解は③

- ①不適。イエスは、律法を守れずにいる人々を罪人として裁くファリサイ派(パリサイ派)の律法主義を批判した。
- ②不適。イエスは「自分が来たのは罪人を招くためであると述べ」て、当時のユダヤ社会で差別されていた人々でも悔い改めれば神から許されると説いた。ただし、悔い改めは神の愛(アガペー)が与えられる条件ではなく、神の愛はすべての人に注がれるものである。イエスは神の愛の特徴を「天の父は悪人にも善人にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨をふらせてくださる」という言

- ②適当。1文目は第2段落、2文目は第3段落の内容に合致する。
- ③不適。様々な考え方の人との出会いを否定する記述は第2段落の内容に反する。また「人間の偉大さを強調する考え」は本文に述べられていない。
- ④不適。「人との出会いを避け」て「自分と向き合う」ことで「深い認識に到達することができる」という記述は、「旅での出会いにより新たな視点や気づきを得ることで」「深い認識に到達する可能性が開かれる」という第2段落の内容に反する。

第3問 標準 ～ やや難 《「武士道」から見る日本の伝統》

問1 20 正解は②

- ①不適。源信は『往生要集』を著して浄土信仰を広めた平安時代の僧。
- ②適当。「市聖」または「阿弥陀聖」と呼ばれた空也についての説明。
- ③・④不適。「全国を遊行し、生活の全てを捨てて念仏に生涯を捧げたことから、『捨聖』と呼ばれた」のは、時宗の開祖である一遍。

問2 21 正解は③

- ①適当。平安時代末期の歌人である西行は出家し、多くの和歌を詠んだ。
- ②適当。『徒然草』の著者である吉田兼好は、無常な人生を肯定することを説いた。
- ③不適。『風姿花伝』を著したのは能楽の大成者である世阿弥。能の命を花に喩えて、舞台芸術を体系的に論じた。水墨画は墨の濃淡によって表現する絵画技法。禅僧であった雪舟は中国に渡って技法を学び、日本独自の水墨画を大成した。
- ④適当。九鬼周造は『「いき」の構造』を著し、江戸時代の美意識である「いき」について分析した。

問3 22 正解は②

- ①不適。古代の日本の神々への信仰は、仏教や儒教などの「外来思想の影響」を受けながら発展していった。
- ②適当。奈良時代に編纂された『古事記』や『日本書紀』では、登場する神々が天皇の祖先であることが記され、天皇支配の正統性が語られた。
- ③不適。日本神話では、まず天地が、その後、神々がおのずから現れる。そこには「つくる」というより「おのずからなる」という発想が見られる。また、伊邪那岐命と伊邪那美命が漂っている土地を固める国産み神話が語られるが、この二神がみずからの意志で行ったわけではなく、彼らよりも上位の「天つ神」の命令で国産みを行ったと記述されている。

- ④不適。古代の日本では、穢れは「人間の心の中から出てくる」ものではなく、外部から付着するもので、「禊や祓」によって簡単に拭い去ることができると考えられていた。

問4 [23] 正解は④

山鹿素行ははじめ朱子学を学んでいたが、抽象的であるとして朱子学を批判し、周公や孔子の教えを直接学ぶことを主張する古学を提唱した。

- ①・②不適。「朱子学の説く理を道德の基礎として重視」したという記述は誤り。
①・③不適。垂加神道を唱えたのは朱子学者の山崎闇斎。

問5 [24] 正解は①

ア。江戸時代初期の禅僧で、職分仏行説を説いた鈴木正三についての説明。

西川如見は江戸時代中期の天文暦算家。

イ。江戸時代後期の農政家である二宮尊徳についての説明。彼は報徳思想を説き、その実践として、合理的な生活設計を行う分度と、余剰を譲る推譲をあげた。

安藤昌益は江戸時代中期に万人直耕を唱えて封建社会を批判した。

石田梅岩は江戸時代中期に心学を創始し町人道德を説いた。

問6 [25] 正解は①

①適当。徳富蘇峰は雑誌『国民の友』を創刊して平民主義を唱えたが、日清戦争後は国家主義へと転じ、満州事変以降も主戦論を展開した。

②不適。幸徳秋水らとともに平民社を設立し、『平民新聞』を発行したのは堺利彦。『平民新聞』の創刊号には、「平民主義・社会主義・平和主義」を理想とすることが宣言されている。

③不適。明六社に参加したが、後年に国権論を唱えた加藤弘之についての説明。

④不適。明六社の結成を呼びかけた森有礼についての説明。

問7 [26] 正解は④

A. 幸徳秋水は中江兆民に師事し、民権論の思想を学んだのちに社会主義に進んだ。

片山潜は幸徳秋水とともに社会民主党を結成したキリスト教社会主義者。

B. 中江兆民はルソーの『社会契約論』を翻訳し「東洋のルソー」と呼ばれた。功利主義を唱えたミルの著作『自由論』は中村正直が翻訳した。

C. ルソーがめざした政治を表す「共和主義」が入る。中江兆民も自由・平等・友愛の原理に基づく民主共和制を理想とし、日本においては立憲君主制を経て段階的に進むという方法を考えた。

問8 27 正解は③

資料文では、茶事を催す場合の一期一会の精神が、充実した人生を送ることにあてはまることを述べている。その都度の茶事を「一生に一度限りのもの」という覚悟をもって催すことが一期一会であり、人生も同様に、この瞬間を全力で生きることが充実した生を可能にするという③の内容が、資料文をまとめたものになる。

①・②は「その都度の茶事」よりも「次の会をよりよく催す」ことが優先されている、①・④は「その都度の瞬間」よりも「未来の目的」の方が優先されている点が誤り。

問9 28 正解は②

①不適。本文によれば、伝統は「常に同じ内容を保っている」わけではなく、また、「過去の思想を新たな解釈から守り、保存し続けてきたもの」でもない。

②適当。本文は、「武士道」をテーマに、伝統とは「過去の思想を継承しつつ、各々の時代状況に応じて新たな解釈を加える中で、形成されてきたもの」(最終段落)と述べている。この「過去の思想の継承」と「新たな解釈を加える」という「二面性」が、選択肢②の「連続性と非連続性」に相当することを読み取ろう。

③不適。①の1文目と同様の記述が誤り。また本文では、「時代を超えた人間の理想を、各々の時代の言葉で語ってきた」伝統の「普遍性と多様性を自覚すること」の大切さを説いているわけではない。

④不適。本文は、伝統を「無から捏造したものすぎない」とは捉えていない。

第4問 標準 《「身体的欲求」と「理性的要求」の関係についての考察》

問1 29 正解は①

①適当。14世紀から16世紀にかけて、イタリアを中心として起こったルネサンスのヒューマニズム(人文主義)の説明として正しい。

②不適。ルターは人間の自由意志を否定している。また、善行ではなく神への信仰によってのみ義とされるという信仰義認説を説いた。

③不適。カトリックとは普遍的という意味で、カトリック教会の価値観や思想をカトリシズムという。カルヴァンはジュネーブでプロテスタント教会の指導者となり、その思想はカルヴァン主義(カルヴィニズム)と呼ばれる。

④不適。ピューリタニズムとは、イギリスにおける英国国教会の宗教改革を不徹底であると批判し、カルヴァン主義による徹底した宗教改革を求めた一派のこと。イグナティウス=デ=ロヨラはカトリックの修道会であるイエズス会を創設し、海

外へ布教活動を行うなど、反宗教改革を行った。

問2 [30] 正解は①

- ①適当・②不適。ロックは自然法思想に立脚し、生命・自由・財産の所有権を「人間が生来持っている権利」と捉えた。「神が君主に与えた権利」を認めるのは王権神授説の考え方。ルソーは自然法を肯定しつつも、「争いや不平等の源泉」を財産の私有にあると考えたため、共同体という公共的なものに自らの権利を譲渡する社会契約説を説いた。
- ③・④不適。ホッブズは人々の権利が侵害される自然状態（「万人の万人に対する戦い」）を望ましくないと考えたため、社会契約によって樹立した絶対的な権力による戦いの制圧を唱えた。ロックは自然状態を平和的なものと捉えたため、彼の社会契約説では、国家権力には抵抗権などによる一定の制約が伴う。

問3 [31] 正解は②

- ①不適。デカルトが「疑うことのできない確実な存在とみなし」たのは「自己の身体」ではなく意識的な自我の存在である。
- ②適当。スピノザは、万物は唯一の実体である神の広がりであるという汎神論を唱え、神の自己表現として万物を直観することを「永遠の相のもとに」という言葉で表現した。
- ③不適。モンテーニュは、「私は何を知っているか」という「懐疑的な精神」がより深い真理探究に向かわせると考え、理性への過信を戒めた。
- ④不適。パスカルは、複雑な全体を一望し直観的に判断を下そうとする「繊細の精神」と、単純な原理から始め、理性的な推論を段階的に進めていく「幾何学的精神」を対置させ、原理の解明には「幾何学的精神」が必要であるが、人間の内面を理解したり、存在の根拠を探求するには「繊細の精神」が必要であるとした。

問4 [32] 正解は②

- A. カントは、理性がたてた道徳法則に自ら自発的に従うことを自律と呼んだ。格率とは、自分だけにあてはまる主観的な行動原則のこと。カントは、意志の格率があらゆる人に妥当する客観的な法則になるように行為せよ、と説いた。
- B. ヘーゲルは内面の道徳と客観的な法を統一した「人倫」について考察した。2つを両立させることをヒントにすれば「共同性」を選ぶことができる。

問5 [33] 正解は③

- ①不適。「刑罰を科す」というような外的制裁が、個々人を道徳的な行為に向かわ

せる強制力となると説いたのはベンサム。

- ②不適。社会革命によって共産主義社会の実現をめざすことを説いたのはマルクスやエンゲルス。
- ③適当。ミルは良心による責めという内的制裁によって、個々人が道徳的行為をするようになると説いた。
- ④不適。「見えざる手」という需要と供給の市場原理によって、「個々人による利益の追求」が「他者や社会の利益の拡大につながっていく」と考えたのはアダム＝スミス。

問6 [34] 正解は④

- ア. 誤 ベーコンが提唱した学問的な方法は「問答法」ではなく「帰納法」である。
- イ. 正 経験論を徹底させたヒュームは自我さえも「知覚の束」にすぎないとした。
- ウ. 正 コントは実証主義を社会の説明に適用し、社会学を創始した。

問7 [35] 正解は③

- ①不適・③適当。実存主義の先駆者とされるニーチェは、キリスト教道徳を弱者の奴隷道徳であると批判し、新たな価値を創造する力への意志をもって生きる超人の思想を説いた。
- ②・④不適。日常に埋没した非本来的な自己のあり方を「ダス＝マン（世人）」として批判し、代替不可能な死と向き合うことで実存としての自覚をもつことを説いたのはドイツの実存主義の哲学者ハイデッガー。

問8 [36] 正解は②

- 適否の判断の着眼点は、各選択肢文に共通する構成から、「連帯のあり方」と「自分の業績をどう捉えるか」だと分かる。
- 資料文によれば、「連帯」とは (a-1) 個々人が対等な立場で互いに尊重し合う関係であり、(a-2) 自分とは異なる他者の生き方に互いに共感を示し合うような関係である。自分の業績の捉え方に関しては、(b)それに与えられる社会的な敬意を自分自身に向けられたものとして、積極的に取り戻さなければならない、と述べている。
- (a-1) に照らすと、③の「他者は自分より優れていると感じ得る」は不適。
④の「自分は他者より優れていると感じ得る」は不適。
- (a-2) に照らすと、①③の「互いに譲歩し合う人間関係」は不適。
- したがって、連帯についての2つの内容に適うのは②のみとなる。
- ②は、「自分の業績が、まさに自分のものとして他者から認められる経験」が自

己肯定感の必要条件である，としているので，(b)の内容と整合する。

- 以上から，資料文の内容説明としては，②が最も適当である。

問9 [37] 正解は①

- ①適当。生を真に謳歌するために、「身体的欲求」と「理性的要求」の両者をどちらかに偏りすぎることなく正しく追求していくべきという本文の趣旨に適う。
- ②不適。1文目の近代以降の西洋思想が身体的欲求の充足を制限し理性的なあり方を追求する立場であるという理解が誤り。また，2文目の今後の私たちの態度として「理性的な生き方」のみを正しく追求するという記述は誤り。
- ③不適。1文目の理解は②と同様に誤り。
- ④不適。1文目の理解は正しいが，2文目の記述は②と同様に誤り。

〈1文目：近代以降の西洋思想の立場の理解〉	〈2文目：今後の態度〉		
「身体的欲求の充足の是認と 理性的要求に服する立場の併存」	⇒正 (①④)	「身体的欲求と理性的要求を 共に正しく追求する」	⇒正 (①③)
「身体的欲求の充足を制限し， 理性的なあり方の追求が支配的」	⇒誤 (②③)	「身体的欲求を制限し 理性的な生き方を正しく追求する」	⇒誤 (②④)

* 歴史に対する評価は，1文目と2文目が整合していれば「学ぶ」，矛盾していれば「反省する」となる。